

定年退職教員紹介

鈴木先生の御退職を迎えて

栗 原 純

鈴木先生は、一九六四年、東京大学文科三類に入学された後、文学部東洋史学科に進級され、東南アジア史を専攻されることになる。入学の年には、アジアで初めてのオリンピックが東京で開催され、日本の高度成長が人々の暮らしを大きく変化させていた一方、公害問題が深刻化していた。先生が過ごされた学生時代は、海外ではベトナム戦争が激化し、中国では「造反有理」が唱えられ、学内では既存の学問のあり方に対する学生からの疑問・批判が噴出した状況にあった。

先生からご研究の対象に東南アジア史を専攻された理由を直接、伺ったことはないが、時代背景がご研究の選択と無関係ではなかったのではないかと思います。

アチェという地名は、二〇〇四年一二月、スマトラ島沖のインド洋に発生した地震により起きた津波の甚大な被害が日本で報道されるまで、おそらくあまりなじみのない地名ではなかったかと思われる。しかし、先生は学生時代からスマトラ島のアチェを研究主題として念頭に置かれていたので、周囲にいた私もその地名は忘れがたく記憶している。

先生の初期の研究成果はやはり、「アチェー西海岸におけるコショウ栽培の発展と新ナングルの形成」と題されて『東南アジア—歴史と文化—』（一九七五年）に掲載された。上述のように、日本では津波と関連させて記憶されてしまったアチェであるが、先生は胡椒の一大産地として発展することを通じて、この地に統治権力がどのようにして成長してきたかの過程を論述されている。

その後も先生はスマトラを中心として研究を続けられ、東南アジアにおける港市国家であるパレンバン王国に関する成果を多く発表されている。本学の紀要である『史論』の論文「パレンバン王国の対外関係——七世紀を中心として——」（一九八六年）では、ムシ川河口から上流約九〇キロに位置し、シュリヴィジャヤ王国の故地として知られるパレンバンに一六世紀後半に建設され、一八二三年まで存続した王国の歴史について取り上げている。パレンバンは、胡椒生産地である内陸農業地域と沿岸交易の基地との結節点に位置しており、そのため王国は富と権力の源泉を東南アジア国際交易と海軍力におおぐ商業・海上権力という性格をもつと規定されている。

胡椒を求めるオランダ東インド会社は、一七世紀なかば以来、王国と協定を締結し、胡椒の確保に着手し、王国の統治地域が胡椒の産地・供給地として発展していくに従い、胡椒の独占を強化し、パレンバンの主要な交易を独占していく。

その後、先生はパレンバン王国の成立期、その事情について、時代を遡及した研究をされている。すなわち、「パレンバン王国初期の輸出品—米輸出の可能性について」（一九九〇年）では、この地が胡椒の供給地になる以前の交易について分析し、米については一四世紀以降は多量の輸出は国難であった点を明らかにし、パレンバンは一五五九年、ジャワからの亡命貴族によって建国されたという見解を示しておられる。

また、この王国の構造について、東南アジアにおける港市という歴史的概念を用いてパレンバンを港市と位置づけ、王国の特徴は、交易に従事する低地社会と胡椒栽培などの農業に従事する高地社会が河川交通によって結合されており、両地域の住民種族、文化などは多様であることを指摘する。

すなわち、王都は外来文化、衣類・塩・鉄製品などを高地に供給し、反対に、高地は伝統的な氏族社会であり人口も多く、主産物の胡椒を低地に供給する。国王は、この交換に介在し、輸入品をより高価で高地社会に送り、反対に、胡椒を市価の半分ほどの低価格で入手することにより、利益を得ていたとする。

退職に際して、先生が『史論』に発表された論考も「パレンバン王国とオランダ東インド会社の一七二二年協定」と題された、それまでの研究の成果である。

上述のように、会社は一七世紀後半から末にかけて王国と協定を結んできたが、一七二二年の協定は、国王側は収税のためにより多くの胡椒をパレンバンから輸出させたい、会社側はより多くの胡椒をバタヴィアに輸送したいという両者の思惑から成立したことをまず明らかにする。

しかし、協定と実態とは異なり、協定では会社は胡椒を独占できるはずであったが、国王や王族は協定に違反し、自らバタヴィアに胡椒を輸送して取引していた。他方、会社も国王の指定した商人に銀貨と綿織物を前渡して胡椒を確保するはずであったが、銀貨不足により有名無実となっていたという。また、一七一七年の会社の報告にはじめて記載された錫は、その後胡椒に替わる重要性を有するようになることが指摘されている。

以上、先生の業績の中から本学の紀要に発表されたご研究を中心に紹介してきたが、先生は、一九八五年度から二年間オランダで研修をされ、公文書館などにおいて、オランダ統治時代のインドネシアに関する貴重な史料を蒐集されている。しかし、周知のように、先生は、この一〇年間近く、学部長をはじめとする要職に就かれて、本学の改革に取り組まれてきた。また、二〇〇〇年には東南アジア史学会会長にもなられ、学会の運営にも責任者として係わられたことも重なり、激務のために学究としての十分な時間的余裕も許されなかったことと思われる。

退職された現在、今まで筐底に仕舞われたままになっていた原史料を本格的に繙く時がようやく訪れたのではないだろうか。先生が本学のために長年奔走されてこられたことに感謝すると共に、先生のこれからのご研究の成果に期待したい。